

事業区分	経常研究	研究期間	平成 20 年度～	評価区分	途中評価
研究テーマ名 (副題)	茶樹優良品種の選定並びに母樹園の設置				
主管の機関・科(研究室)名	研究代表者名	農林技術開発センター 農産園芸研究部門茶業研究室 池下一豊			

<県総合計画等での位置づけ>

長崎県長期総合計画	2. 産業が輝く長崎県 (4) 力強く豊かな農林水産業を育てる 業として成り立つ農林業の所得の確保 基盤技術の向上につながる研究開発
科学技術振興ビジョン	地域産業高度化研究開発 基盤技術プログラム 農林水産技術の高度化
ながさき農林業・農山村活性化計画	・農林業を継承できる経営体の増大 -2 業として成り立つ所得の確保 生産量の増大・安定による農林業者の所得向上

1 研究の概要(100 文字)

「やぶきた」に替わる優良品種を選定し、高品質化・生産性の向上により、茶農家経営の安定・発展を図る。また、リーフ茶やドリンク原料茶など、ニーズを反映した新品種の早期導入により他産地との差別化を図り、地域ブランドを確立する。	
研究項目	茶樹優良品種の選定 有望系統の品種特性及び本県適応性の調査。 母樹園の設置 県奨励・認定品種 9 品種のうち「さえみどり」「あさつゆ」「めいりよく」「おくゆたか」「おくみどり」「さきみどり」「ふうしゅん」の計 7 種の穂木茶園を確保管理し、要請に応じて穂木を配布する

2 研究の必要性

1) 社会的・経済的背景及びニーズ 茶樹優良品種の選定 「やぶきた」は市場性の高い品種であるが、一品種偏重により、香味の画一化、作業時期の集中による摘採遅れ、規模拡大の障害などの問題が発生している。茶園の高樹齢化は、品質・生産性を低下させる原因のひとつとなっている。このため、「やぶきた」に替わる優良品種への改植による茶園の若返りが必要である。また茶産地では、地域ブランド確立に向けて品種導入の動きも活発化しており、本県適応性や品種特性などの試験情報提供が求められている。さらに、近年は高級リーフ茶向けやドリンク原料茶に向く少肥多収性品種等についての情報提供要請が増加し、品種の多様化に対する要望が強くなっている。 母樹園の設置 茶苗の県内産供給量は需要の約 50% と少なく、県内産優良茶苗の安定供給確保が求められており、そのためには純系品種の優良穂木の確保が必要である。県は長崎県茶苗生産組合へ 4 種の母樹園(平成 26 年より 6 種類の予定)の管理委託を行っているが、優良穂木の安定供給のためには県奨励・認定品種中 7 種類の穂木茶園の管理と要請に応じた穂木の配布が必要である。
2) 国、他県、市町、民間での実施の状況または実施の可能性 全国 13ヶ所の研究機関にて調査した有望系統の試験データを共有し、新品種登録に向けた検討を行っている。平成 26 年度からは、野菜茶業研究所が中核となり競争的資金を活用した研究に本県も参加する予定である。また、各有望系統の本県適応性の研究調査、県奨励・認定品種を決定するためのデータ収集、新品種の効率的な普及や茶苗生産体制を取るための純系保存栽培など、長期にわたり栽培研究を請け負える企業・関係団体などは県内には他に無いと考える。

3 効率性(研究項目と内容・方法)

研究項目	研究内容・方法	活動指標		H15～20	H18～23	H20～25	単位
-1	茶樹優良品種の選定 (系適第 10 群)	供試系統数	目標	9			系統数
			実績	9			
-2	茶樹優良品種の選定 (系適第 11 群)	供試系統数	目標		12		系統数
			実績		12		
-3	茶樹優良品種の選定	供試系統数	目標			12	系統数

	(系適第12群)		実績			12					
研究項目	研究内容・方法	活動指標		H23～28	H26～31		単位				
-4	茶樹優良品種の選定 (系適第13群)	供試系統数	目標	12			系統数				
			実績	-							
-5	茶樹優良品種の選定 (育成系統1群)	供試系統数	目標		5		系統数				
			実績		-						
研究項目	研究内容・方法	活動指標		H20	H21	H22	H23	H24	H25	H26	単位
	母樹園の設置	優良純系穂木を 確保・配布	目標							25,000	確保・配布する 穂木数
			実績	124,100	44,000	44,000	28,800	18,000	8,500	-	

1) 参加研究機関等の役割分担

全国13の茶研究機関 役割:有望系統についての試験データを共有し、新品種登録に向けた検討を行う。

長崎県茶苗生産組合 役割:県より委託した4品種の母樹園の管理を行う。また、管理する母樹園及び茶業研究室が配布する穂木を育成管理し県内供給茶苗木を生産する。

2) 予算

研究予算 (千円)	計 (千円)	人件費 (千円)	研究費 (千円)	財源			
				国庫	県債	その他	一財
全体予算	29,166	21,256	7,910	0	0	7,860	50
20年度	2,718	1,836	882	0	0	832	50
21年度	2,695	1,813	882	0	0	882	
22年度	2,708	1,826	882	0	0	882	
23年度	2,672	1,790	882	0	0	882	
24年度	2,665	1,783	882	0	0	882	
25年度	2,244	1,744	500	0	0	500	
26年度	2,244	1,744	500	0	0	500	
27年度	2,244	1,744	500	0	0	500	
28年度	2,244	1,744	500	0	0	500	
29年度	2,244	1,744	500	0	0	500	
30年度	2,244	1,744	500	0	0	500	
31年度	2,244	1,744	500	0	0	500	

(研究開発の途中で見直した事項)

・この課題は、経常研究としては平成26年度で終了とする。なお、本研究の内容は、国の競争的研究資金等で採択となった「実需者の求める、色、香味、機能性成分に優れた茶品種とその栽培・加工技術の開発」と「茶の育成系統評価試験」を活用して対応する。

4 有効性

研究項目	成果指標	目標	実績	H20	H23	H25	得られる成果の補足説明等
-1	選定する有望系統数	2	2	2			選定した「枕崎30号」、「宮崎27号」はそれぞれ「さえあかり」、「なごみゆたか」として品種登録
-2	選定する有望系統数	2	2		2		選定した「宮崎31号」は「きらり31」として品種登録 「枕崎32号」は品種登録にむけて試験継続
-3	選定する有望系統数	3	3			3	選定した「枕崎35号」は「なんめい」として品種登録 「宮崎34号」、「金谷33号」は品種登録にむけて試験継続
研究項目	成果指標	目標	実績	H28	H31	H26	得られる成果の補足説明等
-4	選定する有望系統数	2	-	2			平成23年3月定植 現在生育調査中
-5	選定する有望系統数	2	-		2		平成26年3月定植
	配布する優良純系穂木数	25,000	-			25,000	長崎県茶苗生産組合等から要請のあった穂木数

1) 従来技術・先行技術と比較した新規性、優位性

研究項目 : 既存品種に無い特性を持った系統の把握が可能であり、品種化後速やかに産地への情報提供が実施出来る。

研究項目 : 「やぶきた」以外の奨励・認定品種導入や、本県で使用される茶苗の県内産割合の向上に貢献でき、優良茶苗の安定供給により茶農家経営の安定向上が図られる。

2) 成果の普及

これまでの研究成果

平成20年度以降、選抜推薦した枕崎30号、宮崎27号・枕崎35号、宮崎31号はそれぞれ「さえあかり」「なごみゆたか」「なんめい」「きらり31」として品種化された。その中から、地域適応性試験の成果を基に、全国に先駆けて多収、高品質で耐病性に優れた「さえあかり」を平成23年度に県認定品種とした。この品種の県内栽培面積は2.7ha(平成25年3月現在)である。

研究成果の社会・経済への還元シナリオ

有望系統試験データは、本県の茶奨励品種及び認定品種改定に活用出来る。穂木は県農産園芸課主催の需給調整会議の結果に伴い確保・配布する。

リーフ茶やドリンク原料茶などニーズに対応する奨励品種を迅速に選定し、優良穂木を安定供給することにより優良な茶園の育成につながり、茶農家経営の安定向上が図られる。

研究成果による社会・経済への波及効果の見込み

・茶生産の収量安定品質向上による茶農家の所得向上

・経済効果: 約13,000千円

県内「やぶきた」面積の内10haを「さえあかり」に改植し、一番茶収量20%、価格25%向上
「さえあかり」10ha生産額 - 「やぶきた」10ha生産額=13,000千円

(研究開発の途中で見直した事項)

種類	自己評価	研究評価委員会
事前	<p>(年度) 評価結果 (総合評価段階:)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・必要性 ・効率性 ・有効性 ・総合評価 	<p>(年度) 評価結果 (総合評価段階:)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・必要性 ・効率性 ・有効性 ・総合評価
	対応	対応
途中	<p>(26 年度) 評価結果 (総合評価段階:A)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・必要性 A 茶園地では長年「やぶきた」に偏重した栽培が行われており、優良品種への改植は重要な課題と考える。したがって茶樹優良品種選定試験の必要性には異論はないが、試験の性格上新規性はなく、経常研究として終期を設定せずに試験を継続している現状は一度見直すべきではないか。 ・効率性 A 評価調書の活動指標欄を見る限りでは平成 25 年度まで計画どおり実施されており効率性に問題はないと考えられる。 ・有効性 B 評価調書の成果指標欄を見る限りでは平成 25 年度まで計画どおりの目標達成となっているが、その詳細を説明する資料が不足しているため十分な有効性があるとまでは判断できない。 ・総合評価 A 前述のとおり今後このテーマを経常研究課題として取り組むのか、それとも行政要望課題として別に試験(事業)を行うのか、この機会に行政や普及部門にも相談した上で見解を聞かせて欲しい。 	<p>(26 年度) 評価結果 (総合評価段階:A)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・必要性 A 同左 ・効率性 A 同左 ・有効性 B 同左 ・総合評価 A 同左
	対応	<p>対応</p> <p>この課題は、平成 27 年度からは経常研究としては取り組まないこととする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・研究自体は、農食研事業「実需者の求める、色、香味、機能性成分に優れた茶品種とその栽培・加工技術の開発」と野菜茶試委託事業「茶の育成系統評価試験」で行うこととする。

事後	<p>(年度)</p> <p>評価結果 (総合評価段階:A)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・必要性 A ・効率性 A ・有効性 A <p>・総合評価 A</p>	<p>(年度)</p> <p>評価結果 (総合評価段階:)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・必要性 ・効率性 ・有効性 <p>・総合評価</p>
	対応	対応